

主 題：救世主の預言 2
聖書箇所：イザヤ9章6節

きょう私たちはイザヤ書9：6のみことばを中心に神のみことばを学んでまいります。

預言者イザヤは救いの希望を人々に語りました。この当時、北イスラエルの民はアッシリヤによって苦しめられていました。イザヤ9：2にある「やみの中を歩んでいた民」とか「死の陰の地に住んでいた者たち」といった表現は、恐らく当時の様子を表わしているのでしょう。実際にアッシリヤの王ティグラテ・ピレセルが紀元前734年から32年にかけて北王国イスラエルの主要部分を占領しました。9：1に書かれている「ゼブルンの地」とか「ナフタリの地」といった二つの町は、そのほかの町々とともにこのアッシリヤの王によって占領された場所です。実はこの出来事はⅡ列王記15：29に詳しく記されています。簡単に説明すると、イスラエルにペカという王がいました。この時代にアッシリヤの王ティグラテ・ピレセルがイスラエル王国の北、ちょうど現在のレバノンの南あたりから北王国イスラエルに侵入して来ます。そして、「イヨン、アベル・ベテ・マアカ、ヤノアハ、ケデシュ、ハツオル、ギルアデ、ガリラヤ、ナフタリの全土を占領し、その住民をアッシリヤへ捕え移した。」と書かれています。北から侵攻してきたアッシリヤ軍はこの北の町を順番に征服し、ガリラヤ湖の西側ガリラヤを占領し、次にガリラヤの南からヨルダン川を渡って東側にギルアデの方面までずっと南下して行きます。こうして北イスラエル王国のほとんどの部分が占領され、人々はシリアへと引かれて行った時代です。イスラエルの歴史を振り返った時、神様は彼らの罪に対して確かに正しい審判を下されて来ました。民が罪を犯せば、神は彼らの罪をさばかれました。我々はイスラエルの歴史を通して繰り返しそのことを学ぶわけですが、同時に神はさばきとともに赦しの神であられ、人々が神の前に罪を悔い改めるならばその民を赦されたこともみことばを通して我々は教えられています。

★ **イザヤが語る神の救いのみわざ**

最初にお話ししたように、イザヤ9：2-5を見ると、そのようなアッシリヤの支配下にいたイスラエルの民にイザヤは希望のメッセージを語り、闇の中を歩んでいた民は確かに大きな光を見るのです。2節「死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照」るのです。神様の救いがある、そのままの状態が終わらないと言うのです。3節には「あなたはその国民をふやし、その喜びをまし加えられた。彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。」とあります。なぜかという、その支配から解放され、彼らに自由が与えられるからです。4-5節にも「あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。戦場ではいたすすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。」と、同じことを言うわけです。今のその支配から、その苦しみから解放されるのだという話です。4節に出てきた「ミデヤンの日」というのは、あのギデオンの話です。ミデヤン人たちが恐らく13万人を超える大変な軍勢で攻めて来るわけです。神はこのギデオンを用いて勝利をもたらすわけですが、わずか300人でこのミデヤン人に勝利した様子が士師記の中に出て来ます。なぜ神様がこのようなことをされたのかというと、この勝利が人間の手によるものではなくて、神によるものであることを明らかにするためでした。ですからこうしてイザヤは、イスラエルの人々に対してこのような勝利が神によって与えられるのだということを約束するわけです。たとえどんなに勝利することが不可能と思える敵であったとしても、神が勝利を与えるという約束をこの9章の初めのところとするわけです。

A. 救世主の約束

1. 「ひとりの男の子」

さて、それを受けて6節が始まります。神様がこのみわざをどのようにしてなさるのかを私たちは見て行きます。ここでイザヤはこのわざは救世主によってなされるのだと言います。まず最初に6節「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。」と記されています。ここには救世主の約束が書かれています。

・「みどりご」

「みどりご」ということばが使われています。これは「子ども」と訳せることばです。生まれたばかりの子どもが新芽のように生命力にあふれているところからこの「みどりご」ということばが出てきたと辞書は説明します。ここには「ひとりのみどりご」とありますが、「ひとりの」ということばは原語には出て来ません。この子どもという名詞が男性名詞であり、単数だから、「ひとり」というのがわかるようにこのことばを加えているのです。

・「ひとりの男の子」

そして、「ひとりの男の子が」と次に続いています。これも同じで「ひとり」というのは、ここで使われている「男の子」という名詞が単数だから「ひとり」ということばを補っています。

この二つの箇所が我々に教えてくれることは、神様がイスラエルの人々を解放するために与えられる救世主は「男の子」だと、性別がはっきりしています。しかもたくさんで来るわけではなく、「ひとりの男の子」がこれらのことをなすと聖書の箇所が我々に明らかにします。

・「生まれる」

・「与えられる」

また、動詞を見ると、「生まれる」というのと「与えられる」というのがあります。どちらの動詞も受け身を使っています。つまりここでイザヤが教えていることは、この生まれて来る救世主が男性であるだけではない、この生まれて来る「男の子」は偶然生まれるのではなくて神によって「与えられる」存在だということです。この子の誕生が神のみわざなのだということを明らかにするわけです。救世主に関して皆さんよくご存じのイザヤ7：14にも、この救世主は神が与えることを記しています。そこには「主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。」と書いてあります。「しるしを与える」のは神です。つまり処女マリヤを通して生まれて来られたあの救い主がまさにこの預言の成就であったと言われるわけです。なぜかという、このイザヤ7：14が教えてくれるのは、救世主は神によって与えられる存在であると、まさに9：6と同じことを私たちに教えるわけです。ですから、まずこの6節の最初で救世主が来られるのだと、救世主の約束が記されています。

B. 救世主の目的

同時にこの6節の初めにこの救世主がこの世に来られる目的、神がこの救世主をこの世に送られる目的が書かれています。「ひとりのみどりごが、私たちのために」とあります。「ひとりの男の子が、私たちに」と書かれています。何のためにこの救世主が与えられるのか、目的が記されています。その理由がここに書かれています。「私たちのため」、我々人間のためと。確かに先ほどから説明しているように、北イスラエル王国においてはアッシリヤに対する勝利が必要でした。そしてその勝利を得るために神の助けが必要でした。そして神がそのことを約束された。この神の助けがなければ自分たちでは勝利することができない。

* 我々の問題はその「心」

このような敵を抱えていたのは、当時のイスラエルだけではありません。我々人類みんなどうすることもできない敵を抱えています。それは罪です。パウロはローマ人の手紙の6章の中で我々生まれながらの人間はみんな「罪の奴隷」と言っています。「奴隷」であるがゆえに我々は罪を犯し続けているのです。そして私たちが罪の奴隷であるがゆえに我々の心は罪に汚れ染まっています。ちょうどイエス様がマルコ7：20-23で「：20 人から出るもの、これが、人を汚すのです。」と言われ、人間の心の状態を私たちに示してくださいました。「：21 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、：22 姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、：23 これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」と。多くの皆さんはこの箇所をお読みになって、ここに記されているのが自分の心そのものだということにお気づきになったと思います。私も初めて教会に行った時に聞いた聖書の箇所はここでした。否定したいと思うし、一生懸命否定したかもしれません。正直にこの箇所が私たちに教える人間の心の様子を見た時に、まさにこれは私たちの心、あなたの心を表わしていませんか？パウロは救われる前の自分のことを、救われる前のクリスチャンたちの様子をテトス3：3でこんなふうに教えています。「私たちが以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快楽の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。」と。私たちがその中に含まれていませんか？我々も救いに与る前は「愚かな者であり、不従順」であり、神に逆らう歩みをして来た。神に従うどころか自分の思いどおりの生活をして来た「迷った者である」と。何が正しいのかもわからずに「いろいろな欲情と快楽の奴隷に」なって生きて来た。「悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合」っていた。これが我々が救われる前の姿だと。パウロがそのように告白したのは、彼は自分の心をよく知っていたからです。先ほど我々はイエス様のおことばを見ましたが、まさにそこに記されている人間の心、そこに描かれているのは自分の心です。

私たちが考えなければいけないのは、どうすればこの心を変えることができるのかです。どうすればこの罪に汚れた心を変えることができるのかです。どうしたらこの悪を行ない続けた自分が神に喜ばれる善を行なうことができる人へと生まれ変わることができるのかです。どうすればこの罪に染まった汚れた心から解放されて自由になることができるのかです。悲しい現実、どんなに努力をしようと、どんなに頑張ろうと、どんなに決心しようと私たちは自分の力で自分の心を変えることができないということです。そのことをエレミヤはエレミヤ17：9で「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。」と、非

常に的確に私たちに教えてくれます。人の心は陰険、曲がっているということです。表面はよく見せかけていても、心のうちに悪意があるということです。私たちはいい人のように振る舞っていても、心の中は本当に醜いと。エレミヤはそのように人の心の汚れを明らかにしました。そこには例外はありません。そしてあなたもそのことをご存じのはずです。このどうしようもない曲がった心を一生懸命変えようとしても、この罪に汚れた心をきよい心に変えようとしても、私たちはそれを行なうことができない。絶望の叫びです。きっとこの中にも同じような叫びを上げられた人がおられるはずです。なぜ自分はこんなに罪に汚れているのだろうと、なぜ私はもっときよい人間にならないのだろうと。

同じエレミヤが「クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行なうことができるだろう。」(エレミヤ13:23)と言います。つまり絶対にあなたの努力であなたの心を変えることはできないと教えてくれます。人間は無力です。私たちは自分の心も変えることができない。たとえどんな立派な人の教えであったとしても、もっといえば、宗教も私たちの心を変えることはできません。あふれるばかりの宗教が存在しています。それがどんなに人間にとって素晴らしいと思える教えでも、それらは私たちの行動を少し変えることはできたとしても、私たちの心を変えることはできないと聖書は言うのです。「すぎるな。味わうな。さわるな。」(コロサイ2:21)、そういった人間の教えにとらえられていたユダヤ人たちはこういう人間の教えにしっかりとしがみついていた。こういう教えを守りさえすればと。コロサイの中でパウロは人々に対してこういうことを言っています。「そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」(コロサイ2:23)と。

宗教的に熱心になることによって、あの人はずごい人だとか、素晴らしい人だと人々に感銘を与えるかもしれない。それによって行動が変わって、良い人と思えるような人に少しずつ変わっているかもしれない。そういうふうにならなくなるかもしれない。しかしパウロは、外側が少し変わったとしても、問題なのはあなたの心だと言うのです。みことばが私たちに教え続けてくれていること、主が私たちに教え続けてくださっていることは、問題なのはそういう悪い行ないを生み出す心だと。行動を変えることではなくて、心が変わらなければいけないと。そして何度も見て来たように、それは私たち人間には不可能なことで、心を変えることがおできになる方は、我々を造ってくださった創造主なる神だけです。

* 神だけが心を新しく造りかえることができる

エゼキエル36:26には「あなたがたに新しい心を与え、」と書いてあります。それを与えてくれるのは神です。この聖書の神が我々人間に約束してくださっていることは、神を信じるひとりひとりに例外なく、新しい心を下さるということです。その新しい心が神に喜ばれる新しい行ないを生み出して行くのです。どんなにいい行ないを積むように努力をしても、いい行ないはあなたの心を変えません。でもあなたの心が新しくされることによって、そこから新しい行ないが生まれて来る、これが聖書の教えている救いです。そしてこの救いをなし得ることができるのは、人間ではなくて、神ただひとりだと聖書は教えています。なぜそれができるのか——。聖書の教える神は創造主であり、同時に全能のお方だからです。エレミヤ32:17はこんなふうに教えます。「ああ、神、主よ。まことに、あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました。あなたには何一つできないことはありません。」、この素晴らしい天と地をお造りになった神様だけが全能です、どんなことでも出来る方、だからあなたの心も私の心も新しくされるのです。全能の神だからこそできるみわざだと。同じエレミヤ32:27にも「見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。」と。神にできないことは何一つないと聖書が教えます。こんな神だからこそ私たちが新しく造り変えることができる。この方だけが私たちに新しい心を与えてくれるのです。そしてこの働きをこのみどりごが、この赤子が、この男の子がなすのだとイザヤは言うのです。

C. 救世主の正体

本当にそれが可能なのか——。そのことがこの6節の後に出て来るのです。この生まれ出る救世主、神によって与えられる救世主の正体がここに書かれています。

1. 王である

一つ目「主権はその肩にあり、」と続きます。この「主権」ということばは統治するという意味です。治めるということです。そしてこの「主権はその肩にあり、」というのはこの救世主が王の着物を身につけられる様子、この人の上にその着物がかけられる様子を比喩的に表わしています。つまりこの生まれる救世主、この男の子はすべてのものを治める王であることをまずイザヤは最初に教えるのです。生まれて来るこの救世主はすべての王、すべての支配者であると。

実はこれはイザヤだけの教えではないのです。クリスマスというと、皆さんはミカ5:2を思い出すかもしれない。救世主がどこでお生まれになるかが記されています。ベツレヘムでお生まれになる。そ

の箇所「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。」と記されています。「支配者になる者」ということばが出て来ました。このベツレヘムでお生まれになる救世主はイスラエルの支配者、統治者、王だという話です。またゼカリヤ 14:9でも「主は地のすべての王となられる。」と。聖書の驚くべきところは聖書のメッセージは矛盾していないということです。聖書は私たちにお生まれになる救世主はすべてのものを治められる方だと教えます。そしてイザヤは、お生まれになるこの男の子はすべての王であられ、すべてを統治され、治められるお方であると告げるのです。

主イエス・キリストが最後の最後に、この地上を離れて行かれる時に 11 人の弟子たちをお集めになってあることをお話になります。イエス様は「わたしには天においても、地においても、いっさいの權威が与えられています。」(マタイ 28:18)と言われました。なぜイエス様はこんなことを言われたのか——。イエス様は、私はすべてのものの王であり、すべてのものの主権者であり、約束の救世主だということをはっきりとお話しになったのです。

イザヤが預言した救世主、ミカが教えた救世主、ゼカリヤが語った救世主、それ以外の多くの預言者たちが語った約束の救世主、主イエス・キリストです。ですから、「主権はその肩にあり」というのは、この方は王であるということをお話しています。

2. 「不思議な助言者」

続いて「その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」とあります。まず最後の「呼ばれる」という動詞を見ると、この「みどりご」、「男の子」にはこれらの四つの名前がふさわしいということをお話しているのです。この「男の子」という呼び名で呼ぶにふさわしいお方であると言って、四つの呼び名が出て来ます。一つずつ見て行きます。

まず「不思議な助言者」という呼び名が記されています。この「不思議な」というのは「卓越した」とか、「際立った」とか、「ほかのものと区別されている」という意味です。ほかのものと全く異なる存在だということです。「助言者」というのは、必要な助言を与えてくれる方です。つまりこの生まれてくる「男の子」はほかのだれよりも正しい助言を与えることのできる方です。常に正しい助言を与えることのおできになる方は神以外にはいません。ですから繰り返し「わたしに聞け」と神ご自身が言われている。イザヤ 51:7にも「義を知る者、心にわたしのおしえを持つ民よ。わたしに聞け。」と。いろいろな問題を抱えた時、どうしていいかわからない時、どのように歩んで行くべきかを考えている時、人間に聞くのではなくて私に聞きなさいと。神だけが何が正しいのかをご存じです。神だけが何をすべきかをご存じです。この方はその助言をあなたに与えてくださる方だと。我々は聖書を通して神様の助言をいただいているのです。

詩篇 119:105に「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」とあります。神様はどのように歩んで行ったらいいのかを教えてください。これがみことばです。完全な神が私たちに正しいアドバイスを下さるのです。もちろん私たちはまず神の前に神様どうしましよ、どうすればいいのでしょうかとアドバイスを求めることができます。同時に私たちは人にもアドバイスを求めますが、その対象は間違いなく神とともに生きている人です。どんな人にアドバイスを求めてもいいのではありません。我々が求めるべき人々は主を愛して主のみことばに喜んで従っている人たちです。そのことはその人たちの生き方が示します。その人たちを見ている時にそこにイエス・キリストを見ることができ、そのような人々に私たちはアドバイス、助言を求めるのです。なぜならそのように歩んでいる人は神から祝福をいただいているからです。

詩篇 1:2-5はこう言います。「:1 幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。:2 まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。:3 その人は、水路のそばに植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」と。こんな人々に神の知恵をもらいたいです。こんな人々から何が神の前に正しいのかを聞きたいものです。なぜなら彼らは神の前を正しく歩んでいるからです。神の知恵によって生きているからです。そしてもう一つ言えば、我々信仰者はこんな人になりたいですよ。どんな時でも神様の知恵をいただきながら、みことばにしっかりと立って聖書がこう教えているという、神の知恵によって生きる信仰者になりたいものです。なぜならそのように私たちが歩んで行けば、確実に神はあなたを通してみわざをなして行かれるからです。あなたの信仰がただ成長するだけではない、あなたがこの世にあって私たちの主がどんなにすばらしいお方であるかを明らかにする器として用いられて行く。そんな人に変えられることをだれよりも望んでおられるのは、ご自身のいのちを捨ててあなたを救ってくださった主です。「不思議な助言者」、常に卓越した正しい助言を与えることのおできになる、それがこの方だとイザヤは言います。

3. 「力ある神」

三つ目に「力ある神」と出て来ます。「力ある」、これはまさに神様のご性質です。全能のお方です。不可能なことが何一つないお方です。そしてここで「力ある神」と、この生まれて来る「男の子」を呼んでいます。この「神」ということばは、同様に「神」と訳せる「エロヒム」というヘブライ語ではなく「エル」ということばを使っています。なぜそういうふうに使分けただのかというと、実はこの「エロヒム」ということばは「神」だけではなくて、天使や人間にも使うからです。例えば創世記6:2に「神の子ら」が人の娘らと罪を犯した話が出て来ます。この「神の子ら」とは恐らく天使たちのことです。また出エジプト記21:6ではこの「エロヒム」ということばが人間のさばきつかさに用いられています。ですからイザヤはここでお生まれになる「男の子」はすべてをお造りになった唯一まことの神だと、神ご自身であることを明らかにするために、読者たちが絶対に誤解しないように「エロヒム」ではなくて「エル」を使ったのです。ここでこの聖書の箇所は、お生まれになる救世主、この救い主は神ご自身だとはっきりと私たちに告げてくれているのです。この方が人となってこの世にお見えになり、この方は全能の神ゆえにどんなことでもおできになると。

4. 「永遠の父」

そして、四つ目に「永遠の父」という呼び名が出て来ます。この救世主は「永遠の父」であると。こう聞くと主イエス・キリストの話をしているのではないか、イエス様と父なる神様は違うのではないか、三位一体ということを考えてそう思われる方もおられるかもしれません。ここでこのような呼び名を使ったのは、生まれてくるこの「男の子」、救世主と父なる神とが本質において同じであるということをお教えるために「永遠の父」と言ったというふうにも見えます。またこの生まれて来る救世主は父のように永遠に存在され、父のように永遠にすべてのものを治められるお方として「永遠の父」と呼んだと言うこともできます。いずれにしろこのお生まれになる救世主は、父のように永遠に存在されるだけではなくて、治められるお方であると言うわけです。

5. 「平和の君」

そして最後に「平和の君」と出て来ます。この「君」というのは最高の位についている人、また長であるとか君主であるとか、支配者という意味を持っています。ですから「平和の君」というこの方はただ平和をもたらすだけではない、平和を支配している方でもあると。

・ ゼカリヤの預言

あのバプテスマのヨハネの父親、祭司ゼカリヤが救世主の預言をしたのを思い出してください。ルカ1:79に「暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く。」とあります。ゼカリヤは、生まれて来るこの「男の子」、イエスは、我々を平和の道に導いて行くと。繰り返しますけれども、聖書ってすごいと思いませんか？イザヤはイエスの生まれる約700年ほど前にお生まれになるこの「男の子」、この救世主は「平和の君」であると言いました。平和をもたらすだけではなく、平和を支配しておられる方、そんな存在だと。そしてゼカリヤは、この生まれて来る男の子は我々を平和の道へと導かれる方だと言うのです。我々罪の中を歩んでいた私たち、罪を犯すがゆえに神様と敵対関係にあった私たちを神様と和解させて正しい道へと導いてくださる存在であると。

・ 神との関係

パウロはローマ5:1で、「信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」と言います。罪の中を歩み、神に逆らい続けて来た私たち、我々は生まれながらに神の敵であると言います。だから私たちはさばきを受ける運命にあったのです。ところが今の箇所ではパウロが教えたように、神の敵であった私たちはイエス・キリストによって新しくされて、神様と平和を持つ関係に入れられた。救いです。神様との和解、神様との平和をこの方は与えてくださる。なぜかという、この方は「平和の君」だからです。平和の支配者だから、平和を持っておられる方だから、それを私たちに与えてくださると。

そうしてこの呼び名を見て行く時に、私たちは2節の中に「やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照り輝いたと。まさにそのような存在だということが見えます。まさにこの方は暗闇の中にあつた人々に光、希望をもたらす存在です。

◎ ダビデに与えられた契約の成就 7節

続けて9:7を見ると、この方は平和を与え、平和を保つだけではなくありません。「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」とあります。これはあのダビデ王様に与えられた約束がこの人物によって成就するという話です。この人物こそ、あのダビデの王座に座り、王国を治めるお方であると。将来、私たちはそれを見ます。主イエス・キリストが王座に着座されてすべてを統べ治めることを。イザヤはここでこのお生まれになる「ひとりの男の子」、神が私たちのために遣わされる救世主は私たちに解放をもたらす救世主であり、同時にこの方は神であるがゆえにあのダビデ

に約束されたようにその王座につかれ、すべてのものを治められる偉大な偉大な神だということを明らかにしています。

この方が聖書の中には約束されていたのです。この方こそ人類に約束されていた救世主だったのです。約束されたようにこの世にお見えになり、約束されていたように十字架で死なれ、あなたのすべての罪をそこで赦すことができる贖いのみわざを完成してくださった。この約束の救世主はご自分のいのちと引き換えにあなたに一番必要な罪の赦しを成し遂げてくださった。そしてそれを神は喜んであなたに与えてくださる。お生まれになったイエス・キリストはあなたを救うために来てくださった救世主です。どうにもならないこの罪から、その汚れた心からあなたを救い出して解放し、新しい心を与え、救いを与えるために来てくださった約束の救世主だと。

9:2を見てください。「大きな光を見た」という動詞が出ています。次に「光が照った」という動詞が出ています。3節には「その喜びをまし加えられた」という動詞が出て来ます。「あなたの御前で喜んだ」という動詞が出ています。4節には「粉々に砕かれた」という動詞が出ています。そして6節には「生まれる」ともう一つ「与えられる」という動詞が出て来ます。今幾つかの動詞を挙げました。明らかにこの9章の中で記されていたのは後に来る救世主の話ですから、本来なら未来の話です。ところが今挙げた動詞はすべて完了形として書いてあります。あたかももうすべてのことが起こったかのように書いてあります。なぜか——。この約束は必ず成就することを明らかにしているのです。必ず救世主は来る、必ず救世主は生まれる、必ず救世主が私たちに解放、救いを与えてくださると。それはただの希望ではなかったのです。必ず起こることとして約束されていたのです。

◎ 本当のクリスマス

そして今の私たちは「確かにそのとおり」、「救世主は来てくださった」と言えるのです。この救世主はあらゆる敵から私たちを救いだしてくださるけれども、何よりも我々がどうすることもできなかったこの罪から私たちを救い出してくださる方、そしてそのひとりが私ですと。神は私をその罪から救ってください、私に新しい心を下された。私を生まれ変わらせてくださった。私を救ってくださった。確かにこの約束されていた救世主は、約束されていたことをこの私のうちになしてくださった。だから我々はこのクリスマスをお祝いするのは、このイエス・キリストは偶然お生まれになった方ではなかった。約束されていたお方だったのです。約束されていた時に、約束されていたところにお生まれになり、そして約束されていたことを成し遂げてくださった。これを私たちは語るのです。

今の世の中は「メリークリスマス」と言ってクリスマスの曲を歌いながら、キリストのことを知りません。この救世主のことを知らない。救世主を除いたクリスマスに一体どんな意味があります？主役のないクリスマスです。なぜクリスマスがすばらしいのか、なぜ喜びなのかを知らずに彼らはただ祝っている。我々それを知ったひとりひとりには責任があります。クリスマスをお祝いするのは、私たちをその罪から救ってくださる、約束の救世主が来てくださったことを記念する日だからです。救いに与った皆さん、喜ぶだけではなくて伝えてあげてください。こんなすばらしい救世主がおられるのです。約束どおりにこの世に来てくださった救世主、この方によって信じるすべての人の罪が赦される、どうぞそのメッセージを携えてこの1週間出て行ってください。本当のクリスマスの意義を知らない人たちがこの世にはあふれています。語ることはその祝福に与ったあなたであり、私です。主の助けをいただきながらこの1週間もその務めをしっかりと果たしましょう。

《考えましょう》

1. 私たち人間が正しく生きることができない原因について聖書は何と教えていますか。
2. 心を正しくすることが私たちにできないのはどうしてでしょうか。
3. どうすれば私たちの心は聖くされるのでしょうか。
4. この救世主はどのような祝福をもたらすことができるとイザヤは教えていましたか。